

優秀賞受賞論文

修学旅行における 「学びの場」としての ホテル・旅館利用の考察及び提言

後藤 喜朗

岐阜県不破郡垂井町立垂井小学校

【プロフィール】岐阜県出身。専門は、外国語科教育。公立中学校の英語科教員として勤務後、岐阜県教育委員会指導主事として外国語教育、特別活動、生徒指導、教育相談を歴任。教頭の時、総合的な学習の時間と関連付けた子どもが自ら考え参画する体験型の修学旅行の在り方を研究。市町教育委員会主幹及び岐阜県教育委員会課長補佐の勤務を経て、校長として現在に至る。



1. はじめに

昨今の修学旅行事情は、激変しているという感がある。例えば、東京方面に修学旅行に赴く場合、ホテルステイが一般的になりつつある。10年以上前は、東京の本郷にある旅館の大広間で数十名が布団で寝るという構図が定番であった。時代の移り変わりという事情もあるが、下記のような理由が考えられる。

- ・日本人の生活が欧米化し、布団よりもベッドで就寝する子どもの増加
- ・個人のライフスタイルの変化やプライベートへの配慮
- ・セキュリティ面の強化等安全面に対する意識の高揚

このように生活様式の変化は、今日の修学旅行の在り方に多大な変化を与えている。下記は、修学旅行を終えた中学校3年生の生徒作文である。

私は、修学旅行のホテルがとても印象に残りました。ツインの部屋に2名ずつ宿泊しましたが、部屋はとてもきれいで快適に過ごすことができました。事前に、部屋やバスタブの使い方を学んだので、2名で協力してスムーズに利用することができました。隣の部屋の子たちがカードキーを室内に忘れたので、入室ができなくなりました。その際もホテルのスタッフの方が素早く対応をしてくれました。スタッフの方はいつも笑顔で私たちに接してくださったので、気持ちのよいホテルステイになりました。

私は、観光業に興味があり、将来は、ホテルにかかわる仕事に就きたいと思います。この修学旅行の経験を経て、それが一層強固なものになりました。「もう一度あのホテルに宿泊したい。」とお客さんに思ってもらえるようなホテルのスタッフになりたいと思います。

そのために日頃の学校生活から礼儀作法やマナーを意識したいと思いました。(中学校3年生 女子生徒)

通常、修学旅行を終えての作文と言えば、見学先の印象や仲間との思い出が記述されることが一般的である。しかし、この生徒にとって、修学旅行は自分の将来の夢を実現するステージとなっている。この生徒の意識の変容や作文の記述内容に新しいホテル・旅館経営のコンセプトが述べられていると言っても過言ではない。

また、客観的に修学旅行の意義やねらいを分析するという意味からエビデンスに目を向けてみたい。下記は、平成27年3月に公益財団法人全国修学旅行研究協会が実施した『学びの集大成を図る修学旅行』の取組についてである。この調査は、「修学旅行の実施概要」と「修学旅行における課題調査」という点に係る調査・研究である。その中で【図1】は、修学旅行のねらい、【図2】は、主体的に取り組むための手だてについて言及した調査である。

【図1】からは、「修学旅行のねらいを如何に教科学習の発展にするか。」が課題であることが読み取れる。また、【図2】からは、「修学旅行における事

学びの集大成を図る修学旅行の取組について

【図 1】 修学旅行のねらいで重視したものは（複数回答） 数字は学校数

	関東	東海	近畿	合計	割合
ア. 知識の習得	1,030	257	706	1,993	79.00%
イ. 集団宿泊訓練	403	73	381	857	34.00%
ウ. 公衆道徳習得	761	156	459	1,376	54.50%
エ. 人間関係づくり	836	211	673	1,720	68.10%
オ. 教科学習発展	211	56	127	394	15.60%
カ. 学習の深化	483	203	480	1,166	46.20%
キ. 協力性・主体性の育成	1,071	269	655	1,995	79.00%
ク. 自己課題追究	127	47	56	230	9.10%
ケ. その他	16	30	82	128	5.10%
未記入・空欄	4	0	27	31	1.20%
合計	4,942	1,302	3,646	9,890	

※割合は、全体数 2,524 校に対する値

【図 2】 主体的に取り組むための方法（複数回答） 数字は学校数

	関東	東海	近畿	合計	割合
ア. 生徒中心に計画	486	75	286	847	33.60%
イ. 班行動計画を自作	1,065	151	566	1,782	70.60%
ウ. 自ら体験活動を調べる	283	112	512	907	35.90%
エ. 教科で事前事後学習	190	67	390	647	25.60%
オ. 学校生活で工夫	320	131	513	964	38.20%
カ. その他	4	2	30	36	1.40%
合計	2,348	538	2,297	5,183	

※割合は、全体数 2,524 校に対する値

出典：『学びの集大成を図る修学旅行』の取組について 平成 26 年度研究調査報告書 公益財団法人全国修学旅行研究協会 平成 27 年 3 月

前の学習と事後の学習を如何に充実させるか。」が課題であることが分かる。

学習指導要領によれば、修学旅行等の学校行事の取扱いについて、「実施に当たっては、幼児、高齢者、障がいのある人々などとの触れ合い、自然体験や社会体験などの体験活動を充実するとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するように工夫すること」と述べられている。

その中で体験活動については、「その場限りの活動に終わらせることな

く、事前にそのねらいや意義を生徒に十分理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることにより、意欲をもって活動できるようにするとともに、事後には体験を通して感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながら振り返り文章でまとめたり、発表し合ったりする活動を重視し、他者と体験を共有して幅広い認識につなげる必要がある。」となっている。

上記の調査の中では、特に、事前及び事後の学習が減少していることが浮き彫りになったが、ホテルや旅館を利用した修学旅行における学習成果をよ

り確かなものにするために、事前及び事後の指導の充実が大切である。特に、体験活動については、その場限りの活動に終始しないように、事前にねらいや意義を十分に吟味し、計画を児童生徒自らが立案し、体験活動で得たものを事後の学習の中で、如何に共有化を図るかが重要である。

このように、学習指導要領、特別活動における修学旅行等の学校行事のねらい、児童生徒の声及び実態、修学旅行に係る調査等のエビデンス、修学旅行の現状を考慮すると、修学旅行における「学びの場」としてのホテルや旅

館の効果的な利用のファクターは下記のようになる。

- 修学旅行での、教科や領域等の学習の発展や教科横断的なカリキュラムの開発
- 修学旅行での、ホテルや旅館における魅力的な体験活動の充実
- ホテルや旅館を利用した修学旅行での事前及び事後の指導の工夫・改善

こうしたファクターを念頭に置きながら、修学旅行における「学びの場」としてのホテル・旅館の利用について具体的な提案を行う。

2. 提言

- (1) 修学旅行に係るカリキュラムを工夫・改善し、修学旅行の宿泊先のホテルや旅館を「学習の場」として位置付ける。

これまで修学旅行の宿泊先であるホテルや旅館と言えば、「泊まる場所」というイメージが強かった。しかし、新たに「学びの場」として位置付けるという発想の転換を行う。そのためにまずは、教師自身の意識改革が必要である。

①魅力的な修学旅行の事前学習の在り方について

これまで、修学旅行の事前学習と言えば、しおりを参考にし、行き先や見学場所等の調べ学習が一般的であった。しかし、旅行業界のホテルや旅館のスタッフはある意味、接遇のスペシャリストである。こうしたスタッフから学ぶことも修学旅行における貴重な体験の一つである。そこで、修学旅行に行く前に実際にホテルや旅館のスタッフの方々に学校に来ていただき、接遇の学習を行う。お客様第一主義に立

った丁寧な言葉遣いや温かい接し方は必ず生徒の琴線に訴えるものであるととらえる。昨今、学校では入学試験の対策として面接試験が行われることが一般的である。しかし、それは「面接試験だけの指導」「その場だけの指導」になってしまうという危険がある。やはり、私たち教育者にとっては将来に生きて働く力を児童生徒に身に付けさせることが必要である。そこで、修学旅行の事前学習の場に、ホテルや旅館のスタッフから直接、接遇について学ぶ場を位置付けることが意義深い。これは、平成29年6月に文部科学省から示された新学習指導要領のコンセプトや願いともオーバーラップするものである。

現在、教育現場ではキャリア教育の充実が喫緊の課題となっている。こうしたホテルや旅館のスタッフから接遇について学ぶことは、児童生徒にとって「ホスピタリティ」を学び、将来に生きる力を身に付けることにつながることを確信している。また、本取組がキャリア教育の充実資するものであるととらえる。

②修学旅行の宿泊先であるホテルや旅館の「学びの場」としての位置付けについて

今日の中学校では、生徒に望ましい職業観・勤労観を育成するために職場体験学習を実施することが一般的である。そこで、修学旅行の宿泊先であるホテルや旅館を職場体験学習の場として位置付けてはどうだろうか。実際、学校では教育課程が編成され、各教科や領域等の学習が定められた時間数に応じて実施される。しかしながら、学習指導要領の改訂に伴い、時間数増が示され、時間をどこで生み出すかが学校に突き付けられた大きな課題となっている。そこで、修学旅行と職場体験学習という学校行事を重ねるといったアイデアを提案する。その際、配慮すべきことは修学旅行と職場体験学習のねらいが異なるため、それぞれのねらいが達成できるような目標を設定することである。

また、修学旅行の宿泊先であるホテルや旅館の職場体験学習として、下記のような具体的な内容が考えられる。

- ・フロント業務の補助
- ・大浴場や客室の掃除、ベッドメイキングの補助
- ・エントランスやロビー及びブフロアでの案内の補助
- ・宴会場の準備及び後片付けの補助
- ・送迎用マイクロバスの清掃作業の補助

ホテルや旅館には、修学旅行生の他に一般のお客さんも宿泊されているため、そうした方への配慮や職場体験学習そのものを担当するスタッフも必要である。また、事前に教職員とホテルや旅館サイドの担当者との綿密な打ち合わせが必要になる。

さらに、こうした取組をテレビや新聞等のメディアを活用すれば、他校の修学旅行の試金石にもつながる。学校のホームページや学校便りを活用し、本取組を発信するという手だても考えられる。取り組んだ学校だけの財産にするのではなく、広く広報をすることを通して、他校の実践に生かせるようにすることが重要である。

③修学旅行の宿泊先のホテルや旅館での魅力的な活動について

ア. ロビーコンサートの実施について

学級づくりや望ましい人間関係づくりの手だてとして、合唱に取り組んでいる学校は多い。実際、私自身も中学校に勤務をし、東京に修学旅行に行った時、早稲田大学のコーラスクラブと中学生が交流する場を位置付け、大学生から直接、指導をしていただくという体験を行った。また、その後、大隈講堂前で合唱発表を行った。こうした、非日常的な体験こそが子どもたちの心に非常に残ることを身をもって実感した。

そこで、修学旅行の宿泊先のホテル

や旅館のロビーやエントランスを使ってロビーコンサートを実施してはどうだろうか。事前には、ポスターや館内放送を使用し、宿泊客には十分に周知を図るようにすれば集客も期待できる。

また、ロビーでお客さんの前で歌うというゴールが明確のため、子どもたちにとってより意欲化につながるとらえる。

イ. テーブルマナーの学習について

修学旅行でホテルに宿泊した場合、是非子どもたちに体験をさせたいことが、テーブルマナーに関する学習である。小学校の低学年では、鉛筆の持ち方を徹して指導することが多い。給食指導においても箸の使い方を指導している。そこで、ホテルステイという貴重な体験を通じて、テーブルマナーについて学習する場を位置付けてはどうだろうか。家庭科の学習でテーブルマナーを扱う単元はあるが、修学旅行という場において、テーブルマナーを体験することは、大変意義があると思える。実際に大人になってフォークとナイフの使い方が分からないという若者は少なくない。将来の国際社会を生きる児童生徒にとって、小・中学校でテーブルマナーの学習をすることは貴重な機会になる。さらに、小学生や中学生の時のテーブルマナーの体験が成人した時の生きる力につながるとらえている。

また、昨今ではアレルギー対応も学校現場における喫緊の課題となっている。テーブルマナーを実施する場合は、アレルギーの児童生徒への対応も調理場スタッフとの事前の綿密な打ち合わせが求められる。その際、全ての子どもを大切にするという視点から代替食などの対応を考慮することも必要である。

ウ. 著名人による講演会の開催について

以前、修学旅行で東京を訪問した時、岐阜県に縁のある美川憲一氏の話をお聴く機会に恵まれた。美川憲一氏は、岐

阜県岐阜市にある柳ヶ瀬を舞台にした「柳ヶ瀬ブルース」という曲をヒットさせている。生徒が修学旅行で「美川憲一さんに会いたい。」という手紙を出したところ、ふるさと岐阜を学習するという修学旅行の趣旨や願いに美川憲一さんが賛同し、実現したプランであった。

また、私が勤務をしていた学校の卒業生である漫画家の話を聴く機会ももつことができた。このようにこうした著名人の講演会を聴く機会をホテルや旅館で位置付けてはどうだろうか。著名人をそれぞれの学校に招聘すると旅費等も必要になる。保護者の金銭的な負担を考慮すると、修学旅行先のホテルや旅館で講演会の開催を行うことも選択肢のひとつであると考ええる。

④ 修学旅行の事後の学習の工夫・改善について

ホテルや旅館を利用した修学旅行等の学校行事を実施する場合、事前の指導が大切なことは既述した。事前の指導と同様に、事後の指導を一層充実させることが重要である。一般的には、修学旅行等の学校行事でもPDCAサイクルが位置付けられる。しかしながら、PDCAサイクルは、あくまでも企業が製品や商品を確認し（C: Check）、行動する（A: Action）という考え方である。どちらかと言えば、物に使われることが多いのではないだろうか。そこで、私が勤務していた学校では、PDCAサイクルを学校教育にアレンジし、より実効性のあるものにするため下記のようなサイクルを位置付けていた。

修学旅行を点で終わらせないためにも、児童生徒の意識の連続や教職員が指導のビジョンを明確にもつためにも、こうしたサイクルを位置付けることが肝要である。

◎ PDSIDS サイクル

P (Plan : 計画) ⇒ D (Do : 実践) ⇒ S (See : 評価) ⇒ I (Improve : 改善)

⇒ D (Develop : 発展)

⇒ S (Share : 共有)

ここで、大切なことは、ホテルや旅館を活用した修学旅行の成果と課題を明確（See）にし、取組の改善（Improve）を行い、修学旅行の中身を発展（Develop）させ、次年度へと教職員間（Share）で方向性を明確にすることである。こうした視点から事後の指導について下記に提案する。

ア. 宿泊先のホテルや旅館への御礼状について

携帯やスマホが急速に普及している現在社会において、児童生徒にとって、自分の手で手紙を書くという経験は皆無であると言っても言い過ぎではない。そこで、修学旅行でお世話になったホテルや旅館の方々に対して、御礼の手紙を書くという学習活動を位置付けてはどうだろうか。

時候の挨拶や書式、文面など学級の仲間と読み合って交流すれば、より質の高い手紙が完成するとらえる。また、子どもの目線からのホテルや旅館への新鮮で斬新な感想や意見及び発想は、新たな経営戦略にも大いに参考になるものであると信じて止まない。

ただ単に手紙を書くという活動ではなく、「ホテルや旅館に対する子どもたちからのメッセージ」という位置付けをすれば、学習活動がより具体的な示唆や提案になり、国語科、特別活動、総合的な学習の時間等の教科を超えた横断的な学習への発展も期待できるとらえる。

イ. 修学旅行での宿泊先であるホテルや旅館を題材にした事後の指導について

修学旅行の事後の指導で一般的なものと言えば、感想文、旅行記、修学旅行新聞づくりなどがある。しかしながら、思い切った発想の転換を図り、「修学旅行をより魅力的なものにするために、宿泊先であるホテルや旅館に提言

をしよう。」という課題をもった学習活動も考えられる。手法としては、ビデオレターやプレゼンテーションを作成し、お世話になったホテルや旅館に届けるということが考えられる。この学習は、国語科、社会科、技術・家庭科との横断的な学習のカリキュラム作成が可能である。

このように修学旅行を一過性の学校行事にとどめるのではなく、複数の教科や領域等と関連させながら、次年度につながる改善をすることが重要である。

(2) 各都道府県にある教育センター等、研修施設の研修講座の中に修学旅行に係る講座を位置付け、先進的な修学旅行の実践について学び合う場を位置付ける。

学校で、修学旅行等の学校行事を実践するにあたってまず配慮すべきことは、教職員自身が知識・理解を深めることが重要である。そのためには、修学旅行等の学校行事に関する教職員研修を充実させることが喫緊の課題である。各都道府県には、教育センターや教育研究所等の研修機関が位置付けられ、様々な研修講座が開設されている。その研修講座の中に修学旅行等の学校行事を位置付けてはどうだろうか。実際、全国の教育センターや教育研究所において開催されている講座は、教科の内容に特化したものがほとんどであり、特別活動の中の学校行事に関する研修講座は少ないのが現状である。

また、学校内でも、教科指導、生徒指導、教育相談、特別支援教育等、様々な研修が行われる。外部の講師を招聘し、研修を行うという方法もあるが、各校の児童生徒の実態を一番よく理解しているのは、自校の職員である。そうした視点からも実際に修学旅行に参加をした教職員が、研修報告を兼ねて行うことが可能である。その際の研修テーマを「修学旅行における『学びの場』としてのホテル及び旅館活用」と

して位置付ければ、同じスタンスで教職員相互が学び合うことができる。さらに、その研修の場にアドバイザーとしてホテルや旅館のスタッフが同席すれば、生の声が反映され、より充実した研修になることは言うまでも無い。

(3) 教職員自身が児童生徒の実態に応じた修学旅行等の学校行事の研究を徹して行う。

また、各学校のホームページで修学旅行等の学校行事に係る実践を掲載し、他校の指針となるように発信する。その際、「ホテルや旅館を『学びの場』と位置付ける」という視点を必ず入れるようにする。

教職員自身が生み出した修学旅行等の学校行事の実践をホームページで発信すれば、実践が広まり、教職員相互で学び合うことができる。他の教職員からの意見や感想をいただければ、修学旅行そのものの指導改善にもつながる。特に、「ホテルや旅館を『学びの場』と位置付ける」という視点が明確であるため、焦点化した学び合いが可能である。こうした営みも修学旅行等の学校行事の充実につながる貴重な方途であるととらえる。

3. おわりに

下記は実際に修学旅行を引率した教職員の声である。

私は、修学旅行の宿泊先としてのホテルや旅館の概念が変わりました。現代では、ホテルや旅館は単なる宿泊先ではなく、「学びの場」として位置付けるという発想の転換が求められています。

また、修学旅行は物見遊山ではなく、貴重な体験活動の場として位置付け、「修学旅行でしかできない体験」「修学旅行でしか出会えない人、物、風景」

に留意して、カリキュラムを構成することの重要性も再認識しました。

私たち教職員にとっては、何回も修学旅行を経験することができます。しかし、子どもたちには一生にたった数回の貴重な経験になります。そうした視点からも修学旅行に対する意識改革を率先して行い、「『学びの場』としてのホテルや旅館の効果的な活用の在り方」について研究をより深めたいと思います。

このように修学旅行等の学校行事の取組は、学校の全教育活動を通して指導することが大切である。また、各教科、道徳科、特別活動、総合的な学習の時間の相互の関連を図りながらカリキュラムを作成し、事前及び事後の指導を充実することが求められる。

本校では、今後、修学旅行等の学校行事に関する全体計画及び全体構想を工夫改善し、「『学びの場』としてのホテルや旅館の効果的な活用」という視点からも見直したいと考えている。

昨今、教育現場でも働き方改革が進み、限られた時間の中でいかに効果的な実践を行うのが求められている。「『学びの場』としてのホテルや旅館の効果的な活用」という新たな視点から魅力的な修学旅行等の学校行事を創造することが我々教職員に与えられた最大のミッションであるととらえている。

選考委員

■ 藤野 公孝氏 [選考委員長]

(社) 国際観光文化交流協会 会長・(社) 全日本シティホテル連盟 最高顧問・流通経済大学 社会学部 教授

■ 玉井 和博氏

大妻女子大学教授

■ 丸山 英実氏

株式会社サイグナス代表取締役社長

■ 飯野 智子氏

有限会社フェイスアップ 代表取締役・恵泉女学園大学・公立はこだて未来大学 非常勤講師

■ 村上 実

株式会社オータパブリケーションズ専務取締役 経営調査室長